

# 今こそ「柔道ルネッサンスの活動」を！

## 東日本大震災・被災地宮城の柔道人として思う

今日この文章を書くにあたり、まだ見舞いに行っていない宮城県気仙沼市の柔道の友を早朝に訪ねた。4ヶ月も過ぎたのにまだまだ瓦礫の山が残っていた。悲惨だった。悲しみが甦った。「普及・復興の進まない現状に、これが先進国と言われた日本の姿か？」とごたごたの政治の遅れに怒りも込み上げて来た。そんな中、気仙沼魚市場で威勢のよいセリが行われているのを見て、何かホッとした。

3月11日の大震災後、柔道以外の他のスポーツ、音楽、芸術その他、色々の各分野の方々が、いち早く被災地に必要物を届け、スポーツ教室を開き、音楽を聞かせ、励ましの言葉を語り、又、新聞、その他専門誌等で義援金やボランティアの呼び掛け、震災特集を組んでいる時、柔道界の遅れに何か焦りを感じていた。こんな時、貴誌が震災を特集するページを組むことに大変嬉しく、心から感謝の気持ちいっぱいである。

「大好きだった海が憎らしい」。甚大な被害を受けた宮城県南三陸町の友人のこの言葉で大震災からの復興への戦いが始まった。

「地球はなんでも食べる、終わりのない生き物」、「人は地球の上で生かされている」は、お見舞いをくれた皆様への御礼状の中に書いた私の最初の言葉である。

私の仕事（整骨院）の仲間も犠牲になり、奥様は今だ行方不明である。また、私の柔道の教え子（井上康生君の高校・大学同級生）の子供さんも震災後40数日後に遺体で見つかった。まだ3歳である。

世の非常・無情に心の中では泣き「遺体が見つかった」と喜び、「火葬が出来た」と安堵し、「葬儀が出来た」と癒される遺族の姿に滂沱する。何か異常な被災地の状況である。

震災後、日本中の柔道の関係者、友人知人はもとより、香港・デンマーク・アメリカ・ハワイ・ドイツ・カナダなど海外の柔道の仲間、知人からは心からのお見舞い激励のメールや手紙などを頂いた。

中国・中日友好青島柔道館からは徐殿平館長が指導者と共に石巻市を訪れ、義援金寄贈の他、青島柔道館へのジュニア柔道団の招待交流を約束してくれた。

いち早く山下泰裕さん（東海大学教授）、山口香さん（筑波大学准教授）、井上康生さん（東海大学講師）などはそれぞれの日、宮城の被災地（南三陸町・石巻市・女川町）を訪ねてくれ、避難所の皆さんに激励の言葉を掛けてくれ、その上、時期をみて石巻市での「激励柔道教室」などの開催を、それぞれが約束してくれた。また、神奈川県東海大学相模高校・桐蔭高校・上郷中学校関係者、東京・松前柔道塾などからは柔道の畳が、石巻・木村柔道館、宮城県志津川青年の家や当クラブ（宮城豊里柔道クラブ）に贈られた。慶応大学柔道部OBの方からも「何か協力したい」とのお電話を頂いた。

正に、「柔道・友情・ありがとう」である。

震災後の5月7日、当柔道クラブと長い交流のある東京・松前柔道塾の開塾記念式典に激励を頂く為招待された。その席上、「塾生に震災の状況を」と話を求められたので、次のようなことを話した。

「皆が柔道する時、何が必要かなあ？道場。柔道着。畳。後は・・・？皆に柔道を教える先生。後は・・・？皆の食事を作り、柔道着を洗ってくれるお母さん、柔道をさせてくれるお父さんや家族の方々。そう、みんな必要だよ。今、被災を受けた宮城・岩手・福島などの人は、今言った必要なものが全部壊されたり、流されたり、お父さんお母さんの仕事がなくなったり、行方不明になったりしているんだよ。皆と同じ柔道が好きで、柔道をやりたくても出来ない。だから、塾の皆さんは柔道に行きたくない日もあるかもしれない。稽古が苦しいかもしれない。先生は厳しいかもしれない。でも、好きな柔道を出来る

事に感謝して、目標に向かって頑張ってください」と。

更に「雪の降る中で電気通す為に、電信柱に登って作業する若者、壊れた水道管を治す為に道路の穴の中で泥だらけになって一所懸命スコップを握る若い作業員の方たち、カッコウ良く、頼もしかったよ。色々の職業の方いて、それぞれに頑張ってる社会は動いているんだなあと改めて感じました」と結んだ。

今回、私の自宅、仕事場（整骨院・ディサービス）などの中はめちゃくちゃに壊れた。その後、水も止まり、電気・ガソリンも無く、電話も通せず、食事のままならぬ生活がローソクの中数日間続いた。

そんな中、自分自身の人生の意義、幸せの価値観など大きく変えさせられた。家のある生活、電気のある生活、水、食事のとれる生活、仕事のある生活、会話のできる生活、家族や相手のいる生活、好きなことのできる生活など……。日常の当たり前の生活が「小さくも大きな幸せである」ことを還暦過ぎの男が知った。

また、スポーツ、音楽、絵や陶芸などのあらゆる芸術は、食べ物、時間の余裕、心の余裕などから生まれ、そして発展するものであることも、空腹の寒い部屋のローソクの中でその原点を感じた。

今回、一部の人の醜さも見たが、多くの人々が仕事の休みを利用し、被災地で一所懸命ボランティア活動に汗を流している姿に日本人の持つ「相助相譲」、慈愛の心、思いやりの心を見た。

被災地では色々な援助を求めている。お金、物、声、技術、力……。全てがお布施になる。

休日、全国の高校・大学柔道部員が被災地で一日でもボランティア活動を実施してくれたら、どれくらい喜ばれるであろうか。自分自身にも素晴らしい社会勉強になり、心身の修業にもなると思う。

本年度は、嘉納師範の掲げた「精力善用、自他共栄」の柔道精神に立ち返ろうと始まった「柔道ルネッサンス活動」10年間の集大成とし、総括の年を迎えた。大震災を受けた今こそ、「復興日本」を目指し、全国の柔道関係者に浸透した「柔道ルネッサンス活動」の再出発の必要性を感じている。

戦後日本は立ち上がった。必ず宮城、東北は、日本は立ち上がる。武士道、柔道精神がある限り……。

そして、友人の「もう海と仲直りして頑張りたい」の言葉が出たから。

平成23年（2011年）7月31日

全日本柔道連盟・柔道ルネッサンス特別委員会

都道府県部会部会長 寺澤豊志（宮城県豊里柔道クラブ顧問）

問)